



詩と美術の間で

詩人・美術評論家 ワシオ トシヒコ

概要 詩と美術の間は一見、遠いようで近い。近いようで遠い。微妙なこの緊張関係が、イメージの中でどのように絡み合い、思考され、感受されるのか。今回は、2篇の自作詩を朗読し、更に2作の或る油彩絵画をスクリーンに映し出した上で、自ら詩作し、絵画を評する立場から、日常的ライブ感覚のトークで、創造行為の秘密に迫る。

(2014年3月13日受付)

文教大学大学院 情報学研究科

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100
Tel 0467-53-2111(代表), Fax 0467-54-3724
<http://open.shonan.bunkyo.ac.jp/gs-info/>

情報学研究科「情報をもたらすビックバン」連続講演会 講演録

詩と美術の間で

詩人・美術評論家 ワシオ トシヒコ

ワシオです、こんにちは。今司会者がなにかこそばゆくなるようなご紹介を…。だいたい紹介というのはオーバーになるものですね。ちょっと割り引いて「あ、そういう男なんだ」ということを思っただけであれば幸いです。

で、僕のこのなり格好をちょっと見てください。これ、普通だったら「あいつ失礼じゃない」と、「帽子くらいとれよ」とかね、「そのマフラーはなんだよ」とか、中には言いたい人もいるかもしれないですけど。

僕は美術評論家が表の顔で、裏の顔は詩人なんですけど。むしろこの詩人の顔、裏の顔を表にだして皆さんとお話したいと思ってこういう格好を。詩人であればやはり自由でありたいと願っているんです、常に。だんだん世の中監視社会みたいになってしまっ、互いが互いを監視するネット上でそういうことになったりして、だんだん窮屈になってきていますよね。だいたいこの頃風景が全くちがって僕には見えるんです。例えばそうですね…。駅のプラットフォームではみんな何故かうつむき加減で、何をやっているかと思えば携帯ですね。車中でもそうです、だいたいどこでもそうなってる。文化全体が内向きになりつつある。人間そのものが機械に管理されているというのか。そういうふうになっているんだなという風に。でも、それは言ってみれば今の世界の大きな流れであって、それに僕なんかは待ったをかけたんですよね。せめて声だけは出したいということで。

皆さんの手元にわたっているプリントのなかに「ネット・イリュージョン」という詩がありますけど、これはやっぱり大きなネット社会にたいしてこれで良いのかという疑問を呈している詩なんです。後で読みたいと思いますけれども。

だけれどもこれはもう行くところまで行くんだろう、と。要するに人間の生き様ってのはそういうものだろう、と。何か利便なものを得るとそれにとことんいってしまう。だから、それが一つの大勢であるとすれば、そうでない人たちもいて、流れがそれでいいのか、ということを用いる人がいてもいいんじゃないかと思うんです。僕は現在、携帯を持っています。なぜかという母親が高齢でしたから、いつ呼び出されるかわからないということもあったので。道歩いても電話連絡できるということで持っていたにすぎないんですね。それが去年母もなくなりましたので、もう必要なくなったんですけど。あくまでも携帯電話くらいの程度に考え、持ち歩いています。あとは、まったくやりません。なんていうんですか…メールとかね。そういうのやらないんですよ。あれやるとね、特に批評の仕事なんかをやっていると、私の作品はどうだこうだとか、あなたどこそこでこういったからこうじゃないんですか、とかなんだとか。電話がきたらそれにいちいち反応しなきゃいけない。もう自分の時間がなくなっちゃうんですね。で、そこでいろいろきても反応をしないと、応答をしないということになって。そういう事件が常に新聞紙上に出てますけれども。

そういうことでこのネット社会はいつかどこかで人間の英知を結集して、どっかで歯止めをかけるというかブレーキをかけることも考えなきゃいけないだろう、ということが僕の考え方なんです。例えば僕はモノを書く人間ですから、昔は編集部や、出版社なんかによく行ったりしたんですけどね。今は行ってもダメなんです。みんなもう機械にね、箱にむかっているわけですから、声もかけられないんですよ。昔だと、みんな自分のデスクがあって、そこにいろんな資料がつんでいて、そこでタバコ吸ってたりなんかしていますから、行くときにこやかに来てもらえて、そこでいろんな情報を交換出来

たりするんですね。マンツーマンで、相手の目を見て表情を伺いながら話ぐできた。今は全然できないんですよ。だからほとんど原稿やなんかも…。僕の場合、FAXで原稿を送ったりで…。メール登録とかそういうの一切できないんです。だからなんか…例えば明治時代だと僕はまだちょんまげを結っているわけですよ。みなさんはもうちょんまげを結わないでこうやって暮らしているんですけど。例えばですよ、喩え話。だからそれだけある意味では時代に乗っかれないでいる人間っていうふうにも見えるだろうと思いますね。

そういう男がなんでこの文教大学の情報学部という、ある意味では先端技術を教えるところへきたのか、不思議じゃないか。ここで見事にデジタルとアナログとが接触してるわけですよ。大半がデジタル人間で僕だけがアナログ人間だけだね、これには意味があると思うんです。どういう意味かっていうと、要するにみなさんはデジタルというかグローバルスタンダードでずっときているわけです。それが当然のこととして、未来の仕事をしようとしているわけですね。

大きな潮流の中でそういうことをやってる。僕はそれからちょっとやっぱり外れるというか意識的にはみ出そうとしている部分があって。その取り合わせ、コントラスト、対比関係が面白い。面白いということに意味があるだろう。つまり未だにアナログ的なものの考え方をしているのもいるんだという現実で、ちょっとあいつは大丈夫なのかな、そのままずんずんずんこの格差社会、情報社会の中でとりのこされていくのではないかと。でもいいっていう人も中にはいるわけです。

みなさんは僕の年齢からすると孫というか娘のようなもので、僕の場合は年齢的に先が無いわけですよ。先が無いからこそ待ったも言えるし、歯止めもかけられる。多少おかしい言動もできるということがあるんですね。みなさんは若いのでこれからのことを考えなければいけない。この世界においてどうやって生き、どういう職について、どういう人生設計を立てようかということ考えた場合、やはりこの大きな潮流から外れるわけにはいかない。善かれ悪しかれ。そういう現実なんですね。

そういう潮流に乗りながらも一方ではアナログではどうなのか。僕はアナログってのは言ってみればヒューマンスタンダードだと思っているんです。要するに人間としての原型、元の形、素朴だけど元の形っていうか、そういうものの存在を考えながら先端技術というか、デジタルな社会を考えていくっていうこと、そのことが大事なんです。その間をどうバランスとっていくかということですよ。この社会を信じ切っているのかということに対して、いや、待てよ、ちょっと考えてみようかなということでアナログ的な発想を、まあアナログ的なある種の哲学を考えることによって、むしろデジタル社会をより安全なものというか豊かなものにできるんじゃないか、ということを僕は言いたいわけですね。で、話はちょっとまたかわりますけど、実はこの仕事は高田先生に声をかけられてのことなんですけど。高田先生は文教大学は湘南台駅から30分かかって言っているんです。バスでいまだき30分っていえばひと山こえるじゃないですけど…言ってみれば都市の僻地みたいなところへ行くのかなって思っていたんですよ。そうするとだんだん緑が豊かになって…と思っていたら案外そうでもなくて。というのはそういう大学が今結構あるんです、郊外型のね。僕が関わった駿河台大学や女子美術大学もまあそういうようないって見れば辺境にあるんですけどね。大変だなと思ったんですが、実際にはそうでもないですね。

郊外型の都市っていうか、それをずっと抜けて行って、だんだん近くなって。バス降りてちょっと丘陵状になっているんですかね。高くなっているんですね、で、降りてみなさん、学生さんのあとをくっついていって、向こうが守衛室かなってついていったんですが。そしたらね、おどろいたんです。あっと思ってね。それはねこの建物ね。確かに辺境というのか、そういうところじゃないんですけど。なんか中世のイタリアのある都市、自治都市というのか、ああいうところを思い出しましたね。ちょうど全体が円形になっていてそこに建物が。

あとで時間があれば話したいんですけど、茜色というか橙に近い赤系で統一して、あたかも小自治国家、都市というのかそういうところに着いたな、っていう。どなたがお考えになったか分からないん

だけれど、色彩感覚っていうのは普通はどこかに別の色を大胆に持ってくるのかするんですけど、意外とこう一つのトーンというか色調でまとめたというのはなにかいいですね。メルヘンチックというか、おとぎの国というか、中世的というのか。そういう意味で、いってみればアナログ的な発想というか、こういうアナログっぽいちょっと時間を隔てたような、空間の中でみなさんのように先端の情報に関わる勉強をしているんだなっていうね、そのコントラストが面白いと感じました。

そういう風にだいたい、詩人というのは、一つの現象というかひとつの現実の空間の中に身を預けながら、だけれどもそこから抜け出るというか、常にこう第三者の目というのか客観的に世界をみるというか、そういう習性があるんです。そうでない詩人もいるでしょうけどね。だから詩人というのは自分でありながら自分でないもう一人の自分で自分をみたり、現実をみたり、家族のことを見るとか、社会の…それが詩人なんですね。

僕は詩人というのはもう一人の自分、もう一つの眼をもっている、そういう存在だと思っているんです。要するにインサイダーではないんです。社会があって、国があって学校があって、そこだけが世界の一つじゃないんですよ。ワンクッションをおいて別の目でみる、もう一つの眼を持っている人たち。それが詩人というものではないでしょうか。

(黒板に名前を書く)

名前はこういう風なんですけどね。これはもう一つの眼と関係があるんですよ。いわゆるペンネーム、筆名っていうやつですね。本名はどういう字を書くかという…「鷲尾俊彦」、画数が多くて。鷲尾っていうとまさに猛禽類の鳥を思い出してなんか怖そうでしょ。で、俊彦っていうなよなよとした感じで。だから頭でっかち、しりつぽみというのか、要するにバランスがとれていないんですよ。苗字と名前とのね。これがどうも気になってね。

実は詩を書き始めたのは中学生からです。で、その時、名前を変えたいと思ったんですよ。ペンネーム。画数が多いし難しいし、上と下のバランスが悪い。ペンネームっていうのは変身願望でね、自分であって自分でないものになろうとする。そういう欲望なんです。

天城俊彦とかね、いろいろ考えたんです、ああでもないこうでもないって。でもね、結局はいいペンネームに巡り合えなかったというか、見つけれなかった。それじゃとりあえずは裸のままがいいだろうと。漢字っていうのはだいたいイメージ言語ですよ。漢字そのものから、例えば愛子さんっていったら、愛そのものを、優しさみたいなものをイメージしたりね。漢字っていうのは表意性が強いからです。

だからそういう見方をされちゃうと困るなってこともあった。じゃあまあ裸のまま、骨だけでいいじゃないか。もう真っ裸で人生歩んでみようじゃないか。ということでカタカナにしたわけですね。カタカナそれ自体は何も意味しないんです。これ、みなさん、ワシオトシヒコさんと知らないで何らかの機会であうことになったとしても、先入観を持ちようがないですよ。単なるこれは記号ですから。まったく意味をなさない。表音文字ですからね、音だけの名前です。イメージの持ちようがない。でもそれが狙いだったんです。そしてだんだん僕が詩を書いていくうちに、そのうち、自分なりの漢字のペンネームを持つと思ったんですけど。だんだん日が経ってしまい、すっかりなじんでしまった。

これね、漢字でかかれても、「えっこれが俺なの」という風に本名突きつけられてもわかんないんです。今ではもう郵便物やなんかすべてカタカナ書きで通っていますから。ですからこれもさっきの話じゃないですけど、やっぱりもう一つの眼というのか、親がつけてくれた名前だからこれでいいじゃないかっていうことでなくて、自分のイメージで自分なりの名前を作ろう、考えようっていうことでこういう風にしたわけですね。それが高校時代ですかね。

最初の詩との出会っていうのは、まあみなさんもそうだろうけど、中高校生の頃っていうのは多

感な思春期ですから、いろいろ初めて異性に目覚めるというのかそういうことがあるわけですね。最初はやはりつまらないことで落ち込んだり、まあみなさんと一緒かもしれないんだけど。そういう時ですよ。

まあそういうことで、恋愛詩というか、失恋するとちょこちょこっと日記やなんかを書くんです。手帳やなんかね、言葉をただ連ねるわけですよ。連ねていくうちに、なんか形にしてみようかな、とか。これが詩なのかなっていうことになって。詩の世界にのめりこんでいくとか入っていく。じゃあ他の人は、どういうこと書いているんだろうと。だいたい詩人になる契機っていうのは恋愛がいちばん多いんじゃないかって思いますね。あとは親しい身近な人が亡くなったとか、そういうつらい思いとか。僕もだいたいそういうことで、もう70近いですけどまだ書いているわけです。

恥ずかしい限りだけど、こういうものを書いてお金を貰えるわけでもない。詩っていうのは肩書になりえないんですよ。あなたの肩書はなんですかっていったら詩人なんていうふうなことは言えない。詩人という名刺も持てないんですよ。もし肩書っていうのが職業そのものを表すとすれば、詩人っていうのは今の日本では職業たりえないんですよ。まあ谷川俊太郎とかいるじゃないか、とね、みなさんも知っているような。あの人は十分食べているだろうと思っても、別に彼は詩だけ書いて印税で食べているわけじゃなくて、その周辺のこと、エッセイとか講演とか、そういうようなことで食べているんであって、決して詩そのもので食べているわけじゃない。だから、詩っていうのは無償の行為ですよ。

何もあてにしないというか、ある意味では日記の延長ともいえる。日記なんだけどそれを芸術化するっていうのか、そういうものなんだと思うんですよ。だから、今でもね、詩人ってたくさんいるんですよ。

詩人にもいわゆる社会のなかの半端仕事というか、例えば工事現場で交通整理をやっている人とかいるんです。ちゃんと大学を出て。肉体労働をしながら何をやるかっていうと、詩集を出すんですよ。要するに自費出版です。ほとんど詩集ってのは自費出版ですから。100万円近く取られるかもしれないですね。それを延々とやっているんです。書店に並ぶわけでもなくて、仲間にただあげるだけです。それで生きがいを感じている人がいるっていうこと、みなさん驚きでしょ。100万円出せばあれば、なんか買えるものがあるでしょ。高価なものをバーンと買って誰かを喜ばせるとかプレゼントするとか、いろんな方法があるんだけど。そういうことをしないで、生きがいになっている人たちがいる。それが詩です。

詩くらい相手に何も求めない無償の行為は無いんじゃないかと思えます。話はまた自分のことに帰りますけど。で、僕もずっと詩をかいてきたんですけどね。もちろん詩だけでは食べていけない。その間最初は田舎教師をやりたいということで、岩手県の青森に近いところで高校の教員をやったことがありますけどね。1年いたらもうなんていうか全てが見えたというか、飽きたというか。向上心とかかなんかヤル気満々でしたからこのまま公立高校の教員として、生涯の路線がひかれてそれにのるのは嫌だなと思って。1年でやめてすぐ東京に帰ってきたんです。そのあと出版の仕事、校正の仕事とかいろんなことやって、で、まあ何度も言うように詩だけじゃ食べていけないわけ。詩を書く傍ら大学の非常勤でも何か定職を持たなきゃいけないわけです。いろいろ職をもって、それで美術界に入ったわけです。え、美術界で食べれるの。しかも評論なんて。これもまた大変なんです。けども詩と比べて、マーケットがあるんです。美術界っていうのは、絵描きさんに限らず立体関係でもいいんだけど、美術家は売れば大きいんですよ。そういうためにいろんなコンクールがあったり、ギャラリイがあったり。景気のいい年ならそれなりに売れます。売れるからこそ美術ジャーナリズムができて専門誌があり、そこで書けばわずかな原稿料ですけどももらえる。

僕は窓際っていうのが嫌いなんです。大体詩人ってのは窓際にいてよしとする。詩を書くためにしょうがないやっというんだけど。男が企業に入って窓際でいって過ごすっていうのはどうも…。

束縛されるならやっぱりてっぺんを目指すっていうのか、それやんなきゃ男じゃないっていうまあ古いタイプかもしれないけど、そういうところあるんです。それできないなら苦しくても外へ出て詩を書きたいなら書けばいいじゃないか、っていうのが僕の考え方。

僕が選んだっていうか流れてきたのが美術の世界だったわけですね。そういうことでこの世界も長いんですけど、要するに食べていっているのが美術評論、それは表の顔ですね。裏の顔は中断もありましたけど詩人というのか。そういうことなんですね。

どっちかにしたらいいんじゃないかと思うかもしれないんですけどでも、それはできないことですね。いや、ほかの人はできるかもしれないんですけど僕はできないんですよ。なんでできないかっていうと、美術評論っていうのはだいたい対象があるわけです。美術家、それから作品があるわけですよ。そういうものについて批評家が論じるわけです。だから常に、作家とか作品があって成り立つ仕事。だからそれに時々ね、飽きるっていうのか嫌気がさす、面倒くさいっていうのか。そういうところがあるんですよ。もっと自由になりたいもっと自分の思ったことを勝手に書いてみたいとかね。そうすると、詩の世界がやっぱり必要なんですね。詩の世界があって初めて、それは周りから観れば何の役に立つものでもないかもしれないけど。そこで自分の本音っていうか書きたいことを書く。場合によっては自分の生きる気力になるかもしれないし、やっぱりないとただ作品があって作家がいて、その人たちのことについて論じるだけではなんかこうむなしっていうか。両面があるんですね。その両面のバランスをどうやってとりながら生きていくかっていうことが常に僕の課題になっているわけです。ということであまりみなさんの関心のあることとは関係のない話をしているような気がしますけども。ちょっとここから本質的な話になる。今日は詩と美術の間でというテーマになっているわけです。詩というのは皆さんわかったように言葉の連なりですよ。行分けで書いてあって。

美術っていうのは一種の画像っていうのか、映像っていうのかそういう部分が大きいと思うんですよ。美術ってのはいろんなセクション、分野があるわけで、彫刻やら立体的なものや、みなさんがやっているイラスト・デザイン的なものも大きく分けると美術ですから。みんな視覚的なものですよ。目で見えるもの。こちらは目で見ますけど読むもの、頭の中で認識するもの。

けどもこの画像は画像としてぽっと出す、そういうのもイラスト風なものなんかはそうなのかもしれないけど、やっぱりタイトルっていうのが付きますよね。画題っていうんですか、タイトル。ここに言葉っていうのが関与するわけです。純然たる絵の世界っていうのは絵それ自体、絵だけ画像だけで成り立っているのではなくて、画題が付けられる。それがポイントですね。ここで初めて言葉、詩と関わってくるわけです。

本来美術っていうのは文学、詩じゃないんだからノンタイトルの方がいいんだと無題で行く人もいますよ、当然ね。名前付けるのが嫌だ、名付けなくてもいい。もうその作品それ自体を観てもらえば良い、どういう風に受容するか、それだけの問題なんだから別にタイトルなんて必要ないよ、っていう人もいますけど。一時そういう動きが大きく突出したこともありましたけどね、でも今はやはりタイトルをつける。

題があって作品を記憶してもらおうっていうところがあるわけです。言葉、っていうのが美術の中でも重視されるわけですね。詩と美術の間というのは無関係ではない。お互いに関わりあっているっていうこと。それが今日話すことのポイントですね。

僕は最初、詩と美術って話が来たとき、かなりアカデミックっていうのか突き放した感じで、なんかロジカルに話をしなきゃいけないのかな、学究的っていうのかさかのぼって二つの分野を歴史的に考究しなきゃいけないのかな、とったりして、そうするとみなさんには面白くない話になるんじゃないかなと思ってね。

で、詩と美術のあいだ「で」を付けたんです。この「で」っていうのが意外とポイントなんです。「で」っていうのは助詞ですよ。だからこの下があるんですよ。たとえば「詩と美術のあいだで私は常に行

き来している」「詩と美術の間で悩んでいる」とか「詩と美術のあいだでとんでもないことを考えている」とかね。ものすごく人間臭い部分を隠しているっていう部分があるんです。だから意外とこの「で」というのが大きいのかなと考えますけどね。

書画一致とか書画同源とか言いますよね。我々、書（文字）と絵は別々だっていう認識があるかもしれないんだけど、元々歴史的にさかのぼると、書と絵とは一緒だよっていうところから始まっているわけですね。じゃあこの書と絵は一緒と言ってもどっちかが先でどっちかが後ってというのが、ビックバンがあるわけなんだから、どっちかなんだろうっていうふうに、人間ってというのは区別したいわけだから、あるわけです。

そうするともしかしたら 書というのは書くことだから、何億年前には原始人たちはお互いのコミュニケーションのために、わけのわからないことを地べたに書いたりして、それを文字と称していた部分がありますよね。要するにパピルスに書いたエジプトの象形文字はそうですね。あれは文字でありながら絵という側面ももっているわけです。両方を兼ねて、それがやがて完全に自立していくわけです。それと一緒に、書が先か、絵が先かっていうのは非常に難しい問題ですね。

詩というのも、だから今でこそ文字でプリントされたものや本になったものを読みますけどね。だけど、もともとはこれも一種の音声で発したっていう、だから詩のうえにおいて朗読するっていうことはある種の歴史をふまえた行為なんだと思います。僕も詩を朗読しますけどね。僕の詩ってというのはだいたい人の前で読むっていうことを意識しながら書いていますから。

詩を後で読みますが、結構リズムを考えてます。リズムカルだと思うんですね。ただ小説を読むような感じではない、リズムがある。だから僕の詩ってというのは、朗読に適していると思うんですね。絵と言葉、朗読の問題とかややこしくなってきましたけど、そういうもので詩と美術というのはジャンルとして別々のものではなくて、一緒のものであるっていうことなんです。

この辺のことを歴史的に考察していけば面白いんじゃないかなって言えますけども。絵と詩が非常に似ているっていうお話ししましたよね。絵というのか美術作品にとって言葉ってというのは疎かにできないものであるっていうことを言いました。

さっき日本ってというのは詩というのは職業にはなりえないというのは話したでしょう。けども中国や韓国がすごいんですよ。詩集がベストセラーになりますね。韓国ではベストセラーになった詩集がありますし。中国も伝統的に芸術の中で詩を最も高いものというふうに考えているわけです。場合によっては詩人によって時代の先を見通すというか、そういうことをやる。だから限りなく哲学に近いというかそういうものをまさぐる人たちだということによって高位におくんですね。

日本というのはまだまだ詩の社会的レベルが低いですね。ということは言葉というものを重視していないというか。中国とか韓国のほうが言語文化の先進国ですね。それをなんとなく言いたいですけど。

話はまた元に戻ります。この作品です。ここに対照的な作品、これは絵画ですけどね、あります。観ての通り、ただ女の人をかいただけです。いわゆる具象画っていうか、みたまま、そのまま絵にした、そういう作品に過ぎないですよ。誰でも理解のできる、ああ女の人を描いているんだなというだけのことです。

こっちはわけがわからないですね、ただ色をのせているだけで。もう黒一色ですよ、ほとんどね。これはいわゆるアブストラクト、抽象画っていうふうにいわれるわけですけど。で、色面だけで作品化している、一時アメリカで流行った。日本でも流行りましたけどね。そういう類の完全抽象風な絵ですよ。

で、問題は、この2点の作品、特別有名な作家でもなんでもないんですけど、注目したのがこのタイトルなんです。絵は文学じゃないし言葉じゃないからその視覚だけで絵だけでみてもらえればいいんじゃないかということで、どうでもいいんじゃないか、例えば整理番号で何番、それでもいいんじゃない

ないかっていうふうね、極端に言うと、そういう考え方の人もいますけども、現在ではまあ必ず付けなければいけないですよ。

で、これ「茜さす」っていうタイトル。また別の人の「月は狩りに出かけた」っていう作品なんです。僕はこれを批評するのを頼まれて、ある上野の公募団体の会員の作品ですけどね。その機関誌にこういう人たちの作品評を書かなきゃいけないんです。いろんな風にどうでもかけるんだけど、注目したのはこの「茜さす」なんですよ。

「茜さす」っていうことでみなさんなんか、中学校・高校時代に教科書で習ったことないですか。僕がピーンときたのは「あかねさすうんぬん」の、あの万葉集の歌、そこからきているんだなあと思ったんですよ。

「茜さす」っていうのは、僕のうろ覚えだと 額田王(ぬかたのおおきみ)の歌だと思ったんですね。『茜(あかね)さす、紫野(むらさきの)行き、標野(しめの)行き、野守(のもり)は見ずや、君が袖(そで)振る』こういう歌なんです。

だいたい解釈すると、紫草が栽培してある庭園のところに自分が思っている人がやってきてうろろろしている。自分もそこに行こうとしている。そこには庭園を管理する人がいて、その人に見つかりはしないだろうか。その人と会いたいんだけど、だけれども会えない、という気持ちを謳った、言ってみれば恋歌なんです。

この絵に帰りますけど、「茜さす」っていうのは茜色なんです、赤ね。茜色っていうのはつる草でこういう風に赤っぽい橙色にもちかい色調なんです。この学校も茜色風な色ともいえますよね。もしかしたらこの人は画家自身ではなくて、自分の年頃の娘さんだろうと僕は想像したんです。娘さんが、万葉の歌のような恋をする時期っていうのか、そういう気分をこの絵に表したいと思って、表情やしぐさに表したいと描いたんだろうと、僕は想像したんですね。この作品は絵でありながらタイトルに文学を導入してくる面白さがあるわけです。茜さすを万葉の歌でないとふうに考えちゃうと別の描き方があるんだろうけど、作家が自らこうやっているから、これに注目しなきゃいけないわけですよ。というように画家自身が暗示をかけているわけです。茜さすでなくて、ほかの…「鏡を見る娘」とかふつうにやっちゃうと平凡っていうのか、平凡でも絵がよければそれでいいじゃないかと思うかもしれないんだけど。こういうタイトルをつけることによってこの絵の奥深さが出てくる、現れていると僕は解釈したわけです。

さて、次のこっちの絵をみれば、面白おかしくもなんともない。ただ真っ黒でちょっとグレーっぽいのが入っているだけで、ほとんど漆黒です。闇ですよ、ほとんどね。これについて書くには、こういう傾向の絵は70年代にアメリカで誰それが描いてとかね。歴史をさかのぼってこういうパターンがあったっていうことを、もしかしたら書くかもしれないですけど。作家はそのへん心得ていてそういう薄っぺらな教科書的な批評は避けたいと思ったかもしれないですね。それでつけたタイトルがなんと「月は狩りに出かけた」ですよ。

お月様は狩りに出かけたんですよ。ね、すごいでしょ。このタイトル。僕に言わせれば、「月は狩りに出かけた」これはまあ一行詩ですよ。一行でポエムになっていると思っているんです。僕はこの絵について書くのを普通は取り上げないですよ。こういう絵をあんまり取り上げなかった。でもタイトルに思わずひかれて、これについて書いてみたいと思ったんですね。これは文字通りね、月は狩りに出かけて行ったから、ここに不在なんです。この空間には、ね。普通は、お月様は丸かなんかこう描きや説明になっちゃうからそれを彼はやらないで、月が狩りに出かけていったからこそ、この色面空間には月が無いんだよ。だから真っ暗なんだよって言っているわけですよ。これも絵としてはまあどうでもいいかもしれないんだけど、このタイトルを付けることによってこの絵の世界が深くなったっていう、そういうことなんですよ。

だからやはり言葉、ここでも言葉が作用しているわけです。言葉がいかに大事かっていうことです

ね。デジタルなみなさん仕事をやっていてそれを画像化・映像化して作品化する場合に、もしかしたら今度の作品どうかとか、失敗だとかそう思ったら、場合によっては言葉によってカバーする手もあるんですよ。タイトルで。そうすると、あんまり文学的な教養ってのか、そういうものが無い人はやってもダメなんだけどね。

中にはそういう感性を持っている審査員かなんかと会うと、おおやるじゃないのっていう。単なる映像だけで、デジタルでこういう仕事やっている割にはこの人は深いよ、こんなタイトルをつけちゃうんだから、じゃあ考えようじゃないかとね。いい点をあげたり、良い評価をされたり、そういうことも可能なんです。その辺がやっぱり大事です。画像と言葉、お互いが補完関係にあるっていうのか、そういう関係ですね。

まだ時間があります？デジタル関係でこういうことを考えている。最近ね、公募団体の絵を見るでしょ。よく見ると技術的にうまい下手があるんです。そういう差はあるんだけど。ただ、ともすると同じような作品がずらっと並ぶとね、みんな一緒に見える場合があるんです。どうしてかっていうとね、要するに、ものを考えていく場合、こういう絵っていうのは大体、横軸・縦軸があるでしょ、しかも画面は四角なんです、基本的に。

みなさんの映像も平面化すれば四角になっちゃうわけね。これをね、もうちょっと自由にする。なんで面白くないかっていうと縦軸と横軸に画像を合わせちゃうんですよね。構図を。だから似たようなものになっちゃうんです。美術大学の課題っていうのはね、この縦軸と横軸をいかに克服するか。乗り越えたイメージをつくるかっていうのが大事なんです。

僕だったらどうするかっていうと、簡単に克服できるんですよ。縦軸と横軸の問題。どうするかっていうと、画面は四角くであっても丸く捉えるんです。対象を。画面自体を丸いというふうを考えるわけね。四角だけれども頭の中では丸いととらえればもう角もなくなっちゃうんです。丸いからどっから描いてもいいわけね。そうすると真ん中は無重力状態だから浮遊している。だから手が脇からぬーっと出てきても構わないし、人間が逆さになっても構わないわけね。そうすると限りなくイメージが自由になってくるんです。絵だけじゃなくて、コマーシャルやなんかに言えるんです。テレビやなんかもね、どうしても縦軸と横軸にみんな合わせたコマーシャルやドラマ作りをしているわけです。それを基調にしながら、この僕の球体絵画論で、球体世界ふうに捉えるともっと面白いものができるのね。

でも一時ね、逆さに半分映したりとか、ちょっと僕の球体絵画論を読んだかどうかわかんないんだけど、それらしいことをちらっとやる人がいますよ。逆に人間が逆さになって出てくるとか、横になって…寝てるわけじゃないんだけど、横に立ってるとかね。そういうふうの。だから縦軸・横軸にとらわれないで、球体上に、対象が球体だと捉えればもっと映像がイメージが自由にできるだろうってことを、考えて。今その球体絵画論っていうのを美術誌で連載してるんでまとめたい、と思っているんです。

絵の話はさておいて、元に戻って詩の話をしてしましようか。僕と皆さんの関係をちょうどコントラスト的に言えば、アナログとデジタル人間みたいに、非常に対比的だって言いました。その対比が両極なんだけど、そしてこういう大きな流れは変えようもないところでしょうけれど、だけでも時には、これでいいんだろうかと立ち止まって考えることも必要だろうと、というようなことを考えて書いたのがこの「ネット・イリュージョン」っていう詩なんです。

(自作詩「ネット・イリュージョン」を読む)

最後の連の三行は、遠い社会っていうのか我々の未来っていうのか、まあそういう風になるんじゃないのかっていうことなんですけどね。みなさん、この障害物競走っていうのは体験したことありますか？

ちょっと手を挙げて。これ知らない、やらないのかな運動会で。あまりないですかね？運動会って言ったら障害物競走とか騎馬戦とかねやったんですけど。これは、そのことを読んだんですけどね。一番注目するのは、ネットくぐり。ネットが地面に敷いてあってそこに潜り込んで、いかに抜けるかっていうことをやるんです。そのネットがまさしくインターネット社会、情報社会の網の目のようなネットに僕は見えるわけです。

そこからいかに出るかというよりも、みなさんはそのネットをずっとくぐり続けたいといけないうていうのがあるのかもしれないですよ。生涯、ネットの中で泳がされるっていうか、生きなきゃいけないっていうのか、それをちょっとシニカルに捉えた詩なわけです。

まあそういう一つの世界の流れ、状況っていうのか、それをシニカルに捉えたのがこの「ネット・イリュージョン」。イリュージョンっていうのは幻想ですね。ネット社会の幻想っていうのか。ネット社会という先端技術の社会じゃなくて、等身大の自分のレベルっていうか、日常の社会のことを考えてみたのが、次の「考える人」なんです。

(自作詩「考える人」を読む)

これはね、今皆さんの手許から手許へわたっている『ワシオトシヒコ詩集』っていうアンソロジーの中に入っている作品です。これ、最近困ったことが起きてね。何チャンネルかのコマーシャルで、鶴瓶さんっていうんだっけ。あの人がちょうど階段状のところにかけて、ロダン of 考える人っていう彫刻知っているでしょ？そういうポーズとっているコマーシャルがあるんです。

ただ、彼がね、なんか下半身下着が見えるような感じがするんでイヤなんですけどね。ナレーションがどこかこの詩に似てるんですよ。考えるっていうのとロダンっていうのとくっつけてね。もしかするとこれが巡り巡って誰かの手でそうなったのか、アレンジしたのかわかんないんだけど。いや、まったくこの詩の存在を知らなくて新しくこういうこと考えた人がいたのかもしれないけど、びっくりしちゃいましたよ。それが腰痛の薬のコマーシャルなんです。驚いちゃいましたね。

こっちは真面目というか真摯に書いているものが、なんか半分お笑い風にアレンジされているという、全く僕の誇大妄想のことかもしれないんですけどね。で、これはね、テーマ的には、サラリーマン哀歌(エレジー)なんです。みなさんのお父さん、サラリーマンもいるだろうけれど。その人たちのことを考えて僕は…。僕自身もサラリーマン風のことをやってたことありますけどね。朝早く起きてラッシュ時で、人間が乗っているというよりも貨物…人間を物質化していますよね。貨物電車に乗せられるかのようにギンギンぶめですうっと行く。会社へ着くまでとにかく周辺の風景を見て行くわけです。今日の天気はどうだろうとか。鳥がさえずっているなどと。そして職場へ着くわけですね。オフィスに行って、どっこいしょとかけるわけです。やれやれ、今日一日の始まりだ、という風にね。これは営業マンというより、むしろ内勤の社員のほうでしょうけどね。

要するに彼らは同じことを繰り返すわけです。ここでいう「歩く、見る、座る」というのは家から出てまず歩く。駅まで歩く。駅から電車に乗る。そして職場に近い駅へ。で、歩いて周りを見ながらオフィスに着く。自分のデスクに座る。あーやれやれ今日も始まりだってことで。そして帰りは腰を上げて、また周辺を窺って歩いて帰る。その繰り返しだということなんです。

だんだん同じことを繰り返すと、普段見ている風景がもしかしたら別の風景に見えちゃうかもしれない。もう無色透明な風景に見えるかもしれない、ということ、歩くうちに、ふと考えるわけです。なんで俺は同じところへこうやっていかなければならないのか、同じような仕事をして俺の人生はこれで終わるのか、というようなことを考えるサラリーマンも中にはいるだろうと。それでもなおかつ家族を養うために仕事をしなきゃいけないんだっていう。みんなそうやって生きていくわけです。中には詩人じゃないんだけど、第三の目を自分に向ける人がいて、そしてそれがしんどくなっちゃって、

なんで俺は同じことの繰り返しをしなきゃいけないのかっていう、ある日階段のどこなんか立ち止まって考えてしまう。

で、考える構図がまさに彫刻のロダン風になって固まってしまっただけで石になり、もしかしたら、もうそれっきりの人になってしまう。行路病者っていうのか、もうこれでいいや、面倒くさいよこういうことをやるのは、で、そこで終わっちゃうかもしれないっていう。そういうなんか悲しい詩なんですけどね。

最後はこういうことですね。夕闇がだんだん迫る、もう帰り道ですからね。ホームという形があっても限りなくホームが遠くなる。これどういうことかっていうと、その人には家があるんです、確かに我が家があるわけです。我が家に返ってくるんだけど、核家族化っていうか、こういう現代は帰っても快くお父さんのことを迎えてくれる家ばかりじゃないです。中には遊びに行つて明かりも点いていないとかね、そういうことで。なんで今日も遅くなったのかなんとか、まあそういうことがあったり。男の人と女の人っていうのは究極的には全く違うんですね。違うからこそ、違いを分かったうえでお互いが関わらなきゃならない、付き合わなきゃならない。女の人も同じだよってことは、この年で僕は言えるんだけど、なかなか言えないですね。男性と女性はその性が違うように、ものの考え方が全てことごとく基本的に違う。逆に違うっていうことがわかれば案外やっていけるんです。そうするとああそういうことなのかっていうことだけ。同じと思うから平行線をずっといっちゃうわけね。だからちょうどアナログ人間とデジタル人間がまったく違うっていうことが分かかっていて、どっかで一緒に共同して生きなきゃいけないっていうことと一緒になんです。男と女も全く違う、違うからこそお互い違いを分かったうえで関われば、お互いにフォローできる、手を差し伸べることもできるだろうと。一緒だと思つてぶつかるだけなんです。基本的に違うのに一緒だと思つてね。その辺は、みなさんは女性が多いけれども、何言つてんだよって、早く帰れよなんて中に思っている人もいるかどうか分からないんだけど、まあそういうことを僕は考えるわけです。

ですからこの詩もそういうことで、家へ帰つても性格が違うし、もう帰る気力もなくなっちゃう。もういいや、同じことの繰り返し、ここで石段にかけてじっとしていようと。自分の歩く見る座る、歩く見る座る、歩く見る座るがどっかで切れちゃう、停止しちゃう。するともうこの人は文字通り、組織社会の中では落伍者になってしまう。そこで哲学して考え込んで、また立ち直るっていう手も無きにしも非ずですけどね。そういうことを僕は考えてこの詩を作つたんですね。「考える人」っていうね。日常生活、サラリーマン生活となんとロダンの考える人と美術とを一緒にしちゃつたわけです。ロダンの考える人は決してこういうサラリーマンをモデルにしたわけではないですけどね。そういう風に自由に勝手に想像の羽根をはばたかせるっていうのか、そういうことですね。だから詩人っていうのはある意味で主観性が強い、だからやりきれないなあとか、もうちょっと普通のやつがいいよとかね、そういうことにもなりかねませんけど。

詩人っていうのはこういいながらやっぱり生きなければならない宿命を持っているんだと思いますね。それにはやはり弱くてはだめだ、強くなきゃいけない。強く強く、そして孤独に耐える。この国の中では栄光の人にはなりえないけど。中国や韓国ではないですから、今のところはね。でも将来的には日本もそういう人たち、無償の行為を営々と続ける人たちそういう人たちについて、考えるようになるといいですね、やがてはスポットライトを浴びることになるかもしれないですけど。現状はまだまだそこまでいっていない。基本的にはみなさんもやはりこの創造、クリエイション、クリエイティブとそのイメージーション、想像を創造的にしなければならぬ。想像力を持って創造をしななければいけない。クリエイションとイメージーション、その力っていうんですかね。それをどんどん蓄えていっていただければなと思います。

ということで、なにか一方的な…こういうのは、僕はやっぱり古いタイプですね。なんというか熱しちゃうというか、客観的、公平的、みなさんの立場になつてということがない人間なんで。それを

どう受けて止めてもらえるか不安ではありますが、人間所詮、自分は自分でしかないってことです。自分は自分でしかない、だからその自分をいかに貫けるか、貫くか、鍛えるかっていうことをやっているんです。

最後に、僕は東日本大震災で、釜石で絵を描いていた叔父夫婦とその姉で所沢に住んでいた母を亡くしましたけれども、そういうことに遭遇すると、最後はどうあがいても人間は一人で生まれて一人で亡くなるんだと。最後はぼとりと骨ツボのなかへ収まるだけのこと。だから投げやりには生きろと言うわけではなく、だからこそ毎日が大事だろうと。毎日の出会いを大事に、一刻一刻を楽しんで、そして目標へ向かって進んでください。静聴、ありがとうございました。

(講演終了)

著者略歴

ワシオ トシヒコ Toshihiko Washio



詩人・美術評論家。1943年岩手県釜石市に生まれる。毎日新聞社「一億人の昭和史」編集部などを経て、美術評論などを中心とする文筆の道へ。駿河台大学、女子美術大学講師などを経て現在、美術評論家連盟、日本現代詩人会会員、釜石応援ふるさと大使、NPO法人青木繁「海の幸」会理事。著書に『具象系絵画の現在』（舷燈社）、『異色画家論ノート』（舷燈社）、『現代画家へのメッセージ50人』（生活の友社）、新・日本現代詩文庫『ワシオ・トシヒコ詩集』（土曜美術社出版）、その他編著書多数。

お問合せ先

住所：〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100 文教大学大学院 情報学研究科

電話：0467-53-2111(代表)，ファックス：0467-54-3724（大学院事務室）

メールアドレス：seki@shonan.bunkyo.ac.jp

情報学ジャーナル

情報学ジャーナル Vol.7, No.2 2014年3月31日発行

代表者：関 哲朗

発行所：文教大学大学院 情報学研究科

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

電話：0467-53-2111(代表)

ファックス：0467-54-3724（大学院事務室）

e-mail: gsinfo@www.bunkyo.ac.jp

<http://open.shonan.bunkyo.ac.jp/gs-info/>

編集：文教大学大学院 情報学研究科 研究公開推進委員会

編集長 佐久間 勲，委員 阿部 秀尚

ISSN: 2185-6850